障害者とボランティア活動に対する学生の意識変化

―ボランティア参加者の調査結果から―

李　　在檍[1)]・中村　圭子[2)]・栄長　敬子[3)]

1）新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科
2）新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科
3）新潟青陵大学短期大学部幼児教育学科

Change in Student's Consciousness to People with Disabilities and Volunteer Activity

: Survey Results From the Volunteers

Jaeuk Lee[1)], Keiko Nakamura[2)], Keiko Einaga[3)]

1）NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY
2）NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPERTMENT OF NURSING
3）NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY JUNIOR COLLEGE DEPARTMENT OF EARLY CHILDHOOD EDUCATION

キーワード

ボランティア活動、障害者、意識変化

Key words

volunteer activity, people with disabilities, change in consciousness

Ⅰ　はじめに

今日、ボランティア活動は幅広い分野において活発に展開されている。ボランティア活動の種類、内容、場所、参加者の年齢や性別、支援団体等も実に多様である。我が国においては、1995年の阪神・淡路大震災をきっかけに、その後度重なる自然災害時に全国各地から集まってきたボランティアの活躍で、市民のボランティア活動に対する関心が高まってきたといっても過言ではない。このような状況で、ボランティア活動に関する様々な研究が行われている。しかし、ボランティア活動による障害者に対するイメージの変化に関連する研究は乏しい状況である。そこで、本研究では、2009年に新潟県で開催された第９回全国障害者スポーツ大会における選手団サポートボランティアの参加者を対象に、ボランティア活動の参加前後における障害者に対する意識の変化及び学生のボランティア活動の現状とニーズを明らかにするとともに、これを基礎資料として、学生のボランティア活動を活性化するための支援策を検討した。

Ⅱ　調査の概要

2009年「トキめき新潟大会」（第９回全国障害者スポーツ大会）選手団サポートボランティア[1)]に参加し、各都道府県及び政令指定都市の選手団の送迎、誘導、介助、練習の手伝い、応援、市内観光など大会期間中は常に選手と一緒に行動をしながら献身的にサポートをしていた新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部（以下短大と略す）学生133人を対象にアンケート調査（調査票配布、自記入後回収）を行った。

調査内容は、基本属性として性別及び学年、ボランティア活動（経験の有無、今回参加のきっかけ、活動に関連したニーズ）について、障害者に対する意識について等である。障害者に対する意識の質問項目は、先行研究（田中ら[2)]、松本ら[3)]、山田[4)]、長岡ら[5)]）を参考に独自

に６項目を設定し、「１．そう思う」から「５．そう思わない」の５件法で回答を求めた。調査期間は2010年２月５日～２月12日。有効回収は107件（回収率80.4 %）である。データの分析には統計分析ソフトSPSS17.0を使用し、クロス集計を行った。

倫理的配慮としては、対象者に研究目的、研究への参加は自由意思によること、研究結果を公表することを文書および口頭で説明し、同意を得た。

Ⅲ　調査結果

１．「調査対象者の属性」
―９割以上が女子学生―

男女比率は男子学生4.6%、女子学生95.4%であった。学年は、大学３年生が29.0%で最も多く、短大１年生18.7%、大学２年生と大学１年生が各々17.8%、大学４年生10.3%、短大２年生6.5%であった。

２．「ボランティア活動」について

⑴　ボランティア活動経験の有無―７割以上の学生がボランティアの経験がある―

「選手団サポートボランティア」に参加する以前のボランティア活動の経験の有無については、「１回～２回だけの単発的なボランティア活動に参加したことがある」が全体の48.1%と最も多く、「定期的なボランティア活動に参加したことがある」24.5%と合わせると全体の７割以上が何らかのボランティア活動を経験していることが明らかになった。「関心はあったが実際に参加したのは初めてである」27.4%で全体の約３割は今回のボランティアが初体験であった。

⑵　ボランティア活動参加のきっかけ―多くの学生が自分の意思で参加―

選手団サポートボランティアに参加したきっかけは（複数回答）、「学校で選手団サポートボランティアを募集することを知って」が59.4%、「自分の意思」が56.6%で高い割合を占めていた。次に「友人、先輩、後輩の誘い」が21.7%、「障害者スポーツへの関心」が12.3%となっていた。一方、低かったのは、「学校の教員の勧め」、「障害者との交流」、「家族・親族の勧め」、「テレビ、ラジオ、新聞、ポスターなどの広告をみて」であり、合わせても全体の１割に満たなかった。今回のボランティア活動への参加は、他人の勧めより自発的なものであって、案内や情報提供・募集などの組織的活動が主たるきっかけになっていたと考えられる。

⑶　ボランティア活動に対する意識―活動は楽しく、誰もが参加できる―

ボランティア活動に対する意識については、「活動は楽しい」29.1%、「誰にでも参加できる」20.7%、「新しい仲間ができる」20.4%であった。ボランティア活動は楽しく、特定の人だけではなく、専門的知識と技術を必ずしも持っていなくても参加できると認識していることがわかった（図１）。

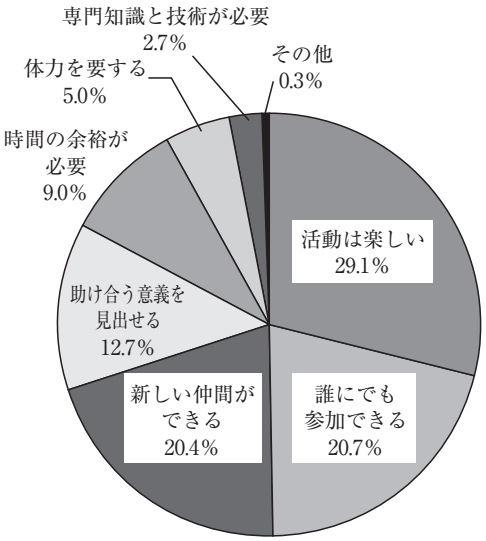

図１　ボランティア活動に対する意識（複数回答）

⑷　ボランティア活動に対するニーズ―授業欠席への配慮を希望―

これからボランティア活動を行う上で、大学や教員に支援してほしいことについては、「授業欠席への配慮」28.3%が最も多く、他の項目と約10～20ポイントの差がみられた。続いて、「ボランティアに関する情報提供」19.1%、「ボランティア活動に参加できる機会づくり」18.0%、「経済的支援（交通費や食事代など）」16.9%、「ボランティアに関するアドバイス」11.0%、「ボランティアに関する講演会・研修会・イベントなどの開催」6.6%となっていた（図２）。

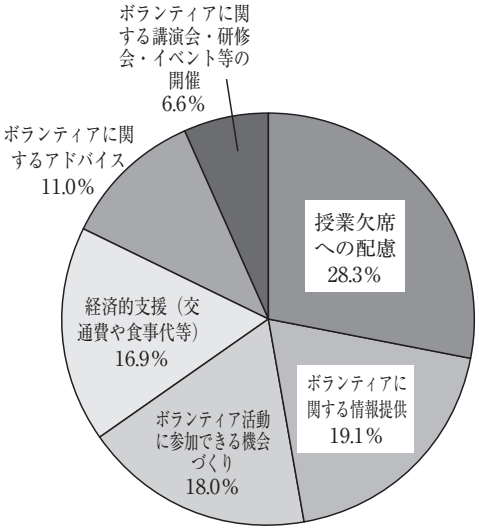

図２　ボランティア活動に対するニーズ（複数回答）

３．「障害者に対する意識」について

⑴　障害者・児との関わりの有無―７割以上の学生が関わった経験がある―

「選手団サポートボランティア」に参加する以前の障害者・児との関わりの有無については、「あり」71.0%と「なし」29.0%となっていた。また、「あり」と答えた学生が障害者・児と関わった時期については、「大学または短大入学後」30.3%と「小学生」29.5%が中心となっていた。次いで「中学生」22.0%で、この３項目を合わせると全体の８割以上を占めていた。さらに、障害者・児と関わった機会（内容）別にみると、「学校の実習」25.8%と「ボランティア活動」24.2%が全体の5割を超える高い割合を占めていた。その他の項目では、「個人的な付き合い」16.1%、「学校行事」9.7%、「サークル活動」7.3%となっていた。多くの学生が大学または短大入学後に実習やボランティア活動を通じて、障害者・児と関わっていたことが明らかになった。

⑵　障害者に対する意識の変化（ボランティア参加前後の比較）

①「近寄りがたいと思う」について

今回のボランティア参加前後における障害者に対する意識を比較してみると、「ややそう思う」が参加前34.6%から参加後4.7%へと激減し、「そう思わない」が参加前14.0%から参加後43.9%へと３倍以上に増加していた（図３）。

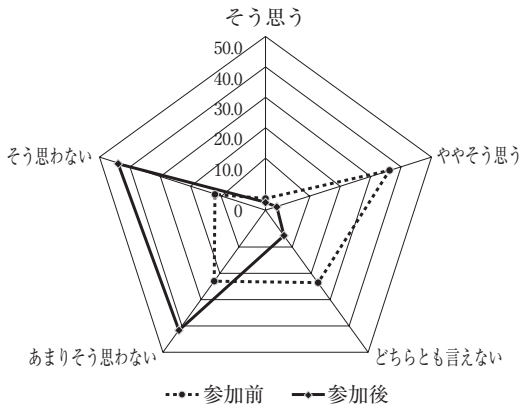

図３　近寄りがたいと思う（参加前後別）

②「常に他者の介助が必要だと思う」について

参加前に最も多かったのは「ややそう思う」で32.7%であったが、参加後は「あまりそう思わない」45.7%、「そう思わない」29.5%と大きな変化がみられた（図４）。

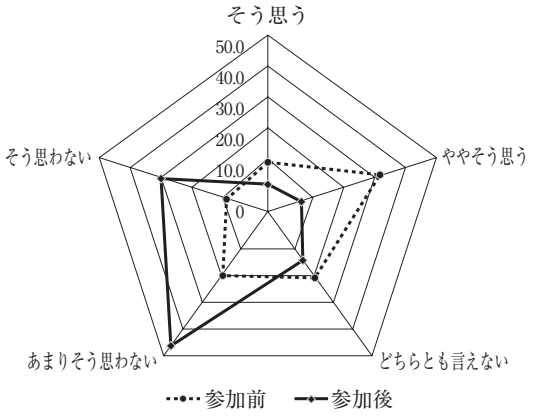

図４　常に他者の介助が必要だと思う（参加前後別）

③「我慢強いと思う」について

参加前後ともに「どちらとも言えない」が高い割合を占めていた。「そう思う」・「ややそう思う」の割合については、参加前には1.9%・17.8%だったものが、参加後には12.3%・22.6%となり、合わせて34.9%と増加していた。その一方で、「そう思わない」も参加前3.7%から参加後9.4%に増加していた（図５）。

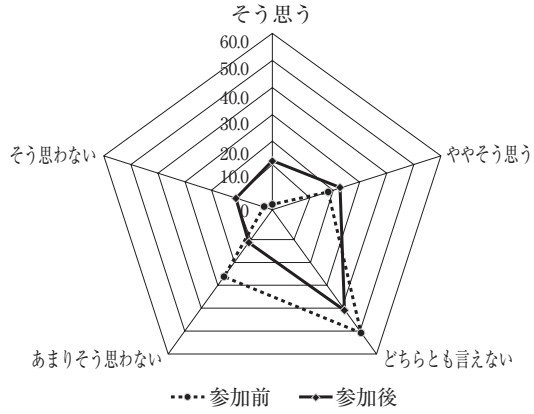

図５　我慢強いと思う（参加前後別）

④「障害がない人と変わりないと思う」について

参加前には「そう思う」9.4%、「ややそう思う」18.9%、合わせて28.3％であったのに対し、参加後は両者を合わせて57.6%となり約30ポイント高くなっていた。その一方で、「そう思わない」も参加前4.7%から参加後12.3%と３倍弱に増加した（図６）。

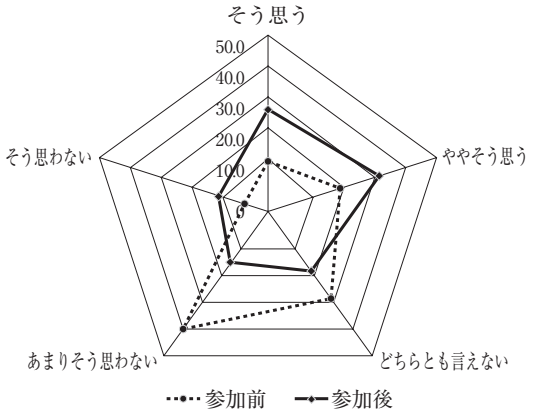

図６　障害がない人と変わりないと思う（参加前後別）

⑤「障害者の立場になって考えようと思う」について

参加前から「そう思う」27.1%、「ややそう思う」38.3%が高い割合を占めていたが、参加後には「そう思う」が53.3%と倍増し、「ややそう思う」26.2%と合わせて約８割を占めていた。その一方で、「そう思わない」も参加前4.7%から参加後8.4%に増加していた（図７）。

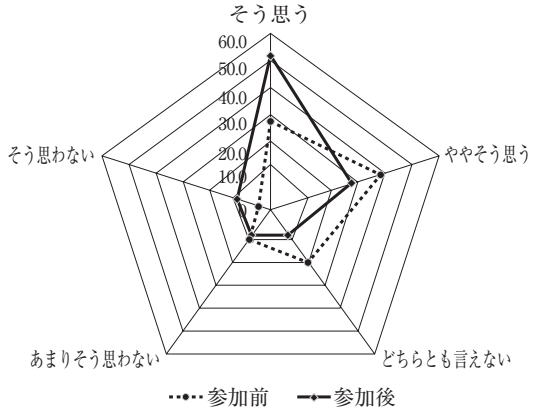

図７　障害者の立場になって考えようと思う（参加前後別）

⑥「困っている障害者に声をかけたり手助けしようと思う」について

参加前は「そう思う」13.1%、「ややそう思う」29.9%、両者を合わせて43%であったが、参加後は「そう思う」41.1%、「ややそう思う」30.8%とどちらも増加し、合わせて71.9％となっていた（図８）。

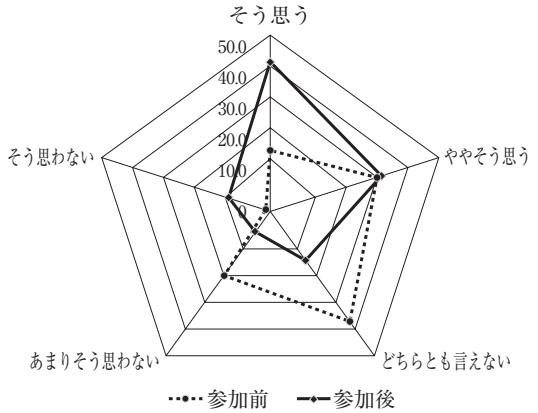

図８　困っている障害者に声をかけたり手助けしようと思う（参加前後別）

Ⅳ　考察

この調査の目的は、障害者とボランティアに対する学生の意識変化を明らかにすることにある。しかし、今回の選手団サポートボランティア活動を経験していない学生との比較を行っていない点や、ボランティア活動の対象が障害者に限定されているという点で限界がある。また、障害者に対する意識の質問項目が、親和性・行動・生活能力のみで性格や感受性などの因子がなかったこと、自由記述欄を設けなかったことから、障害者に対する意識の全体像が導出されたとは言い難い。障害の種類や程度による意識の差異についても同様である。しかしその中でも、ボランティア活動への参加により、障害者に対する意識が大きく変化したことが明らかになった。障害者に対する意識は、障害者との関わり経験の有無を問わず、ポジティブな方向に、或いは障害がない人と変わらないという認識に変化していた。これは、競技練習や大会本番だけでなく、日常性が現れやすい食事や移動などの場面を通して、その人なりの考えを持ち、自立して生活を営んでいることがわかり、人間としての本質は変わらないこと、支援が常時必要ではないことを実感したためと考えられる。イメージとしての障害者像から障害者の理解に近づいたことに連動して、近寄りがたさも低減されたと解釈される。このように、イベントボランティアという一過的な関わりであっても、障害者に対する意識や態度が肯定的に変化していることから、ボランティア活動は、障害者と健常者の共生社会を実現するための一助となることが期待される。

ボランティア活動に対する受けとめは、楽しく誰もが参加できるというものであり、活動を通して新しい仲間が出来るという期待や喜びを感じていた。しかし、学生がボランティア活動を行おうとする際、障壁も存在する。それには授業の忙しさ、アルバイトとの両立、活動のきっかけがないこと、経済的負担が伴うこと、精神的・体力的自信の無さ等があると言われている。本調査におけるボランティア活動に対するニーズとしても授業欠席への配慮が最も多く、参加するための情報提供やきっかけづくり、経済的支援などもあげられている。従って、ボランティア活動に関心を抱いて終わることなく、行動化できるための支援体制を整える必要がある。中でも、授業欠席への配慮と経済的支援の有無は活動参加の可否に直結する要因である。また、今後、定期的なボランティア活動に対する単位認定が行われれば、ボランティア活動が一層促進される可能性がある。大学・短大教育におけるボランティア活動の意義と位置づけを明らかにし、カリキュラムを検討することも今後の課題である。

Ⅴ　結論

ボランティア活動の経験がある学生が多いこと、実習やボランティア活動が障害者・児と接する機会となっていること、ボランティア活動への参加により障害者に対する意識がポジティブに変化したことが明らかになった。直接的交流で障害者に対する理解が深まり、試行錯誤と発見が次なるボランティア活動への関心を生み出していると考えられた。

この結果を踏まえ、これから多くの学生がボランティア活動の経験を活かし、高齢者・子ども・障害者及び地域との関わりを持ちながら充実した学生生活を送ることができるような支援が求められる。

今後の主体的なボランティア活動の推進に向けて、自分に適したボランティア活動を選択できるきめ細やかな情報提供が必要であり、ボランティアに参加した学生の活動内容や感想、ボランティアを受けた人々の声を発信することも有用と考えられる。そして、ボランティア活動への関心を行動へと具現化するための研修や試行体験の場の提供など、コーディネーターを中心とした支援活動の拡充が期待されるところである。

［注・参考文献］

1）大会に参加する選手及び役員の介助・誘導等のサポートを行い大会運営の円滑化を図ることが目的である。新潟県内７校の大学・短大・専門学校が「選手団サポートボランティア養成校」として委嘱され、本大会に658人が参加した。選手との交流を通して次世代に対する障害者スポーツの啓発を行うために、障害についての知識や対応の仕方などを学ぶ講座を平成20年４月から大会前まで行った。

2）田中淳子・須河内貢．知的障害者に対する援助経験による態度変容に関する基礎的研究．岡山学院大学・岡山短期大学紀要．2004;27:59-67.

3）松本耕二・田引俊和．障がい者スポーツをささえるボランティアからみた知的障がい者のイメージと日常生活における意識・態度．山口県立大学社会福祉学部紀要．2009;⑶:27-38.

4）山田力也．障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研究．西九州大学・佐賀短期大学紀要．2007;37:11-18.

5）長岡真希子・山路真佐子・小笠原サキ子・宮越不二子・池田信子・柳屋道子．看護大学生の障害者福祉援助実習における障害者に対する印象と実習からの学び．秋田大学医学部保健学科紀要．2004;12⑴:37-47.

6）海老名和子．短大生のボランティア意識に対する研究（第１報）．静岡県立大学短期大学部研究紀要．2003;17:93-98.

7）大岡由佳・原田幹子・田中智子・ポドリヤクナタリヤ・辻丸秀策・福山裕夫．肢体不自由者に対する学生の意識調査．久留米大学文学部紀要．2006;社会福祉学科編６:97-105.

8）田引俊和．障害者スポーツを支えるボランティアの意識の特徴に関する一考察．北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要．2008;⑴:241-249.

9）独立行政法人日本学生支援機構．平成20年度大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書．東京:日本学生支援機構学生生活部学生生活計画課;2009.

10）松永文和．学生ボランティア活動の現状からみる推進課題―学生ボランティアの活動実態・意識調査から―．ボランティアコーディネーター白書2007-2009年版．108-112．大阪:社会福祉法人大阪ボランティア協会;2008.

11）三井情報開発株式会社総合研究所．ボランティア活動を推進する社会的気運醸成に関する調査研究報告書．東京:三井情報開発株式会社総合研究所;2004.

12）巡静一・早瀬昇．ボランティアの理論と実際．80-97．東京:中央法規出版社;2009.